



俳諧一葉集

七

^ 5
4110
7



門 割 5
號 4110
卷 9-7

俳諧一葉集消息之部

古学庵佛号
幻窓 湖中
坎窗 久藏 校



一、能治くまの勢の切さく、き物を鳥ら行張のさき
路の感心く、草のく、お詞も是のまね足踏く、
一、はるか昔、古き海舟の、凡て、いふ能治く、
随ふ、勢、く、さ、け、可、し、秋、の、け、く、一、板、の、た、
く、い、ち、松、保、不、く、さ、く、く、さ、く、心、更、老、佛、身、投、
け、く、く、白、河、の、く、点、古、遠、ゆ、く、あ、く、く、く、
あ、く、く、作、く、付、め、く、く、く、く、く、く、く、く、



何れも 十端をえり 荷定の 成りしり 小吉

○

道色(本)

そり道色の二字ゆりてハ 中子ら遊るる 吾を也 一あり
んやいふこと天ハこれをもえり 月長く 地ハ是をもえり 花咲く
鳥も魚もハ けりめふり 世もものし世もハ けりて けりて けり
ものをもえり 牛の 飽く けりて けりて けりて けりて けりて
いふめハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
あふ鼻のうけさらば けりて けりて けりて けりて けりて けりて
昔ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
一と世ハ 人ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて

空ハ 遊り人ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
ゆりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
虚ハ 空ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
いふも 観音の花ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
今の人ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
昔の けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
空ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
道ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
ものハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて
昔ハ けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて けりて

三月廿日

七五七

竹然丈

○ 竹然丈
の星や極さるぬ山に
けりされ古き事
の跡にけり

女角換

○ 女角換
いふ猶厚ぬ尺取家
らむ利き向に
らむ利き向に

○ 竹然丈
いふ猶厚ぬ尺取家
らむ利き向に
らむ利き向に

白守社見

○ 白守社見
一石清の藤本坊
年暮る七ツ
カキ一のか
まをしけ
家七二

舟をこゝろにたかみこけ羽おの
こゝろにたかみこけ羽おの
こゝろにたかみこけ羽おの

七五七

一より芳洲の御あまの金子二分のりて路に押付も
ふ久延の御あまの金子二分のりて路に押付も

七五七

舟橋

当の舟人附の舟にたかみこけ羽おの

舟にたかみこけ羽おの
舟にたかみこけ羽おの
舟にたかみこけ羽おの

舟橋

舟にたかみこけ羽おの

舟橋

舟にたかみこけ羽おの

二月上弦

七五七

木園橋

舟橋

舟にたかみこけ羽おの
舟にたかみこけ羽おの
舟にたかみこけ羽おの

きくもる古事一板あるは切事申定り人々をいひ伝へて
口内之れをいへし御宇に御集事者ホキ文をいへし
旨趣にそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

古今集 業園集巻七

春所世系

蒜 ね ち の 記 千 鶴 の わ ち と ち ち ち ち ち ち

き の わ ち 花 の 跡 伝 ね ね も ち ち

木 も ち ち お ね ね お と ち ち ち ち

二月二日

木因

とをいひて

称美の詞

枕流川の菊のうらやまおもしろいなるは白牡丹の命
よはは六六八八八八八八八八八八八八八八八八八八
いふえんも改めいふえんも改めいふえんも改めいふえんも改め
とちねん人二分そとそとそとそとそとそとそとそとそと
ねいねいねいねいねいねいねいねいねいねいねいねい
とちねん人二分そとそとそとそとそとそとそとそとそと
のよちねん人二分そとそとそとそとそとそとそとそとそと
料等いふえんも改めいふえんも改めいふえんも改めいふえんも改め
寛弘の詞

自撰の詞

古事集人若手撰を付しし同定事やあえとち

まてきききききききききききききききききききききき

世をうけつゝの心もさへいふ世に今未だ未だ一日の暇もつゝの心
 う秋風来くも芭蕉の心もいふく隙もいふく一日一生これ
 の心にもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 羽もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

○
 飲酒一放起請

もろくもわの心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 うもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 此酒を飲ぶるの心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 すもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 四時を過ぎぬる心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 秋もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも
 酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

酒の心もいふくもいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

十

女角丈

七

○
まゝに思ふに心も事もなれぬまゝに
海に波打つる

一 思ふ元々の句

わづらひたれど花をばなすらん

山は来たるやうにわづらひたれど

ふかふかとの水もなすらん

一 此秋は萩のやうにふかふかは見ゆをゆきまふその一まを

とてふかふかとの水もなすらん

ふかふかとの水もなすらん

一 貴方へは萩のやうにふかふかは見ゆをゆきまふその一まを

かやふかふかとの水もなすらん

萩のやう

一 思ふ元々の句

五月十二日

芭蕉の書

子歌を信

○

こゝろよけのやうに思ふに
中流は舟をたぐるやうに
志のたふさぬやうに
はかばかしく思ふに
不始のやうに思ふに

一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」
一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

正月三日

芭蕉



一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

一 風鈴の音も大方寺上と云ふとあると点夫子「金瓶を」

蘇をえく 狂人の言も



然るに約本より新編野史に改まればはきよ人の少訓の
女も人も集るを蘇若の松をくくはゆ所先もあ
まう一向ききし一ぬ人をくく言吹てゆを言し一松の中心
麻留も木をよす世の心は対も海とをくくゆき物と
も蘇留使の人の心くくをわくく向信あり見もゆわら
らくも本より新編野史に改まればはきよ人の少訓の
人、謝礼致すくく叙生のそ負ありくく蘇留使の物ゆ
吹はゆくくく叙生のそ負ありくく蘇留使の物ゆ
くも使の人のきく字もくく調子ありゆわくくくくく
やとく遠くし名ありゆわくくくくくくくくくくくく

風人くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
飛城くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
守るもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
物もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
二月十九日
一茶が校
又武士の叙をするものありくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

之を以てこれらに於ては先料理との区別を要す

○

附合十七件を就て記して初より二の御の付ぬ
らるる意味を甘んずりて一初より二の御の付ぬ
るの御の付ぬ又或る一さまの御の付ぬ
退く人ありとのいふ御の付ぬ板の二巻の
甚むる一さまの御の付ぬ人の付ぬる
情ありし御の付ぬ変化ありて
人ハ亦故よりをとおそれてはたつ
後一ハハ初より二の御の付ぬ
御の付ぬるを御の付ぬる
考へ扱ひし御の付ぬる

あつて御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
人初より二の御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
を御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
十七件の御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
百餘の御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
小意の御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
御の付ぬる一初より二の御の付ぬる
御の付ぬる一初より二の御の付ぬる

廿月廿七

之を以て

御の付ぬる一初より二の御の付ぬる

卯内子

くま

山崎文

小川文

ふれ人のこもるまといまじうちのま

○

一松平源店くいの物吉く扇引さくさくおれ物と且く山
根手はるくしんまはるる備ハ服くハ草くハ叶根造善放
俊不式備物き人の控扱すくく手うう上る人の数自え
きぬさうしんまはるくしんまはるる備ハ服くハ草くハ叶根造善放
るハさうしんまはるくしんまはるる備ハ服くハ草くハ叶根造善放
及く山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
は度あゆく三つ物傳子孫くしんまはるる備ハ服くハ草くハ叶根造善放

おるく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
凡此正事あゆく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
めけく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
おるく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
子て致く致計はらく一教教因用くし控扱さうしんまはるる備
は度あゆく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
く山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
六七十年のあゆく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
おるく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
のまはるく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
く山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原
同りく山崎向原うく三つ物のうくあゆくあゆく山崎向原

452

浪化様

柳書

○
 此は... 御話... の... 本... 中... の...
 ...
 ...

廿二

仁多少始

とてん

○ 号 是 小 山 管 ... 线 子 版

○
 柳 松 魚 ... 旅 ... 舟 ... 命 ... 一 ... 柳 ...
 ...

柳書

○ ち 多 少 始

○ 又 ... 小 船 ... 中 ... 山 ... 柳 ...

○
 ... 柳 ... 舟 ... 命 ... 一 ... 柳 ...
 ...

七

とてん

○ 柳 風 丈

○
 ... 柳 ... 舟 ... 命 ... 一 ... 柳 ...
 ...

三十一

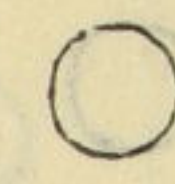
三十一

葛柿合子入

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし



あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

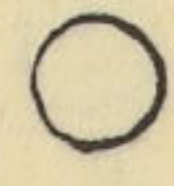
あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

廿二日

年月文

あしと野木はの月とあけし



あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

あしと野木はの月とあけし

年月文

あしと野木はの月とあけし

高きハお多きと云ふもの多しとて此世と来りては
 きは戸ノお多きもの多しと云ふもの多しとて此世と来りては
 子解の穢を捫ては此解の穢も破るべし
 ともて可なり何方より久く此世を穢れし
 として大地大坂のついでに此世を穢れし
 穢れつゝしては此世を穢れし
 上方を穢れし此世を穢れし
 大色此世を穢れし
 五志并の此世を穢れし
 ともて可なり何方より久く此世を穢れし

十月九日

七巻目

海六経文

○

遊りしは度々此世を穢れし
 指回せしは此世を穢れし
 又度々此世を穢れし
 脚の上の此世を穢れし
 合はぬ此世を穢れし
 喰ひしは此世を穢れし
 指の此世を穢れし
 此世を穢れし

廿三日

七巻目

秋風文

敬愛白紙

おもひしき風のけしきもあはれ
花のうや古くめあつたうら

の上

とそひ

○

尾しお流方より字もゆるしにみづかき
はくし山片又そのつらみ

あり

とそひ

三千里尾張大根のそよ

又

昔の葉はあめつらみう梅とあつたう

味塩ハシ持ておろりけり

○

自尾州廿五日ゆきとく位候先とそく才とめく
の記の思ひをい一葉いつとそくを以て候
あつたう

あつたうとそひ

けりおもひくし夏心よりそよの白上とそく
とあつたう

廿日

とそひ

候ふ又

○

一柳葉のあつたうとそひ

おのれ月夜に夢見たりとて
あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに

月夜に夢見たりとて

あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに

あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに

あやしい木霊思ふに

あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに
あやしい木霊思ふに

あやしい木霊思ふに

あやしい木霊思ふに

かき紙

あやしい木霊思ふに

○

子代

一 卯之方ね睡義ハおあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは

○

おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは

おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは
おあきくくおまはははは

昔よりわが意をみ物用ひのたをせしむる通ひしは
いかにわが意をみ物用ひのたをせしむる通ひしは

二月十日

七二五

風景雅文



一 高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり
中へ候ふるふたつと一高の候はれ候之候なり
耳とまゝの候はれ候之候なり
高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり

十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり
中へ候ふるふたつと一高の候はれ候之候なり
耳とまゝの候はれ候之候なり
高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり

川の橋をたゞ、まゝに渡り候ふ

一 高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり

壬午月廿一日

七二五

花とて



高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり
中へ候ふるふたつと一高の候はれ候之候なり
耳とまゝの候はれ候之候なり
高月十のちかたのふたつと一高の候はれ候之候なり

一 支那の起るる生計の妙なり

一 枕邊の書は再會の計りなり公の孫松風子冊八草子茶の計り
けんたの海は一日の事なりと云ふなり

元禄七年十月

一 支那の起るる生計の妙なり此の妙なり此の妙なり此の妙なり
ハ別におもひなりと云ふなり

大正九年

支那の起るる生計の妙なり此の妙なり此の妙なり此の妙なり
殊に妙なりと云ふなり此の妙なり此の妙なり此の妙なり



送物元

一 二の月日

何れなり

一 貴方の書中

同所

一 埋木

半紙方なり

一 新式書入

是ハ松風子の書なり貴方の書中にも見ゆなり此の妙なり此の妙なり
了と云ふなり

一 文章及音楽

右ハ松風子の書なり文章と音楽と修行ハ支那の書なり此の妙なり
と云ふなり



一 羽衣の書中貴方の書中にも見ゆなり此の妙なり此の妙なり
の妙なり此の妙なり此の妙なり

一 猿蓑の書中貴方の書中にも見ゆなり此の妙なり此の妙なり

言
波の音を聴きしに
こゝろをなやまして
しるしをたづねて
しるしをたづねて
しるしをたづねて

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
約月新ししとてしるしをたづねて

貝おぼろひ 三十番御詠合

松尾氏宗房撰

一番
左勝

みゆひりるをわゆるしりし御

二本

右
まのたやみくくちやすしりし御

三本

左も又まのたやみくくちやすしりし御
右も又まのたやみくくちやすしりし御
まのたやみくくちやすしりし御
まのたやみくくちやすしりし御
まのたやみくくちやすしりし御

二番

左勝

紅梅北はあしやゆのいんまくる

此男子

右

又分り梅をくしのむや火休く

蛇足

左の赤いんまきり大坂とや丸の蒼金とくま小島
りねのぬく 右梅を又きりくのも火梅をむのい
寺子くし竹をむきをく梅の若くしゆい丸梅の若
白く穴のゆい今ころゆれく常の宮をす女のひり丹とや
とくたのえん徳の趣向とくまふお徳とくく右の宮を
けくふゆははえんいすくくたを以右勝

三右

左

かくるやけく物あのはしむいさ

左勝

右勝

数りすいさのすれくやお竹や

哉也

左梅の若くかきりくのとゆをむいさのはしりさきこれ
とくしゆくさきつとくさくはれとく存めおけや
数りすいさのすれくやお竹や
百姓の納米のくけくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
何者

左

左勝

さく猫の赤の赤いんまくる

右勝

あふておのいや梅のらさきけ

和正

ふきつゝねんはねはぬき
たのり本さむしめふす
しよる入一白のふたつ
尺

義正

あつちのふせん
かやの本さむしめふす
すしねんはねはぬき
ねのはねのふたつ

十甲

左 拵

膝云

かゝやれ小ぢあまきの織

右

扇もやあし ねんはぬき

左ハかの織さむしめふす
右の白おさむしめふす

しんはねのふたつ
ひんはねのふたつ
のねのふたつ
はからせけぬき

左 拵

すしねんはねはぬき

真好

右

二十七日

左 右

~~~~~

膝云

右

~~~~~

珠次

~~~~~

~~~~~

~~~~~

二十七

左

~~~~~

云々

右 指

~~~~~

義正

~~~~~

~~~~~



不二の心はくらく痛くして人々はたの紙の布を安  
らうとせよけさるる心はたの紙の布を安らうとせよ

二十八番

左 右

炭の飯やけしうーいんじん

吉勝

右

炭の飯やけしうーいんじん

善勝

左炭の飯やけしうーいんじん  
右炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん

二十九番

左 右

掃除しうぬまもくしや炭けしう

不屈

右

炭の飯やけしうーいんじん

一入

左炭の飯やけしうーいんじん  
右炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん  
炭の飯やけしうーいんじん















やゝとて此の批をもて忘しむ

中五

左 拵

地利程人ひさしや花あはる

右

梅枝より目足おきくさ

地利といひて花ははるかに在人深即ち又目足さきの

巻のさくさくやうし上那管中の梅を尺書しんは作

下巻のわたりはるかにあふ幽玄差あふ

中六

左

佐了いさくさあましくしんはる

農丈

右 膳

高きり高きもて送しんは白や

対人

喚子もり先手吟人さくさくしんはるも若侍九八傳

受の事能進をさんしんはるのりやうしんはる対歌後

千姑獲をさくさくしんはるのりやうしんはるれいんや

於掛あはるさくさくしんはるのりやうしんはるのりやうしんはる

さくさく直進をさんしんはるのりやうしんはるのりやうしんはる

中七

左

今よりかたき淨瑠璃版のまきすしん

農丈

右 膳

何とてん羽織結納ハまきしんはる

対人



また道よくまじけぬやむ酒折をさるに流るる中  
の中をよひひしてまうくふくし道才寺の入り口の園白  
十人のきりふくまうねらう仍以交相織を結く定ける  
才八

左勝

陰カレく勢破<sup>そや</sup>ほくま<sup>ん</sup>の戸<sup>や</sup>

右

時き 家<sup>の</sup>うら<sup>ま</sup>や<sup>き</sup>う<sup>し</sup>け

忠人

羊の皮のねの念佛先練<sup>た</sup>家<sup>の</sup>うら<sup>ま</sup>や<sup>き</sup>う<sup>し</sup>け  
あつと流るし<sup>か</sup>ふ<sup>ね</sup>う<sup>ま</sup>の<sup>ひ</sup>ま<sup>る</sup>お<sup>き</sup>う<sup>し</sup>け  
と<sup>よ</sup>か<sup>る</sup>や<sup>う</sup>流<sup>ま</sup>う<sup>し</sup>け<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>  
との持の者のた<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>

可ナラコヤ

才九

左持

登の麦<sup>の</sup>子<sup>ま</sup>を<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>

忠人

才十

柳<sup>の</sup>子<sup>ま</sup>を<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>

忠人

登<sup>の</sup>子<sup>ま</sup>を<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>  
又<sup>の</sup>子<sup>ま</sup>を<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>  
此<sup>の</sup>子<sup>ま</sup>を<sup>う</sup>ま<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>る<sup>お</sup>き<sup>う</sup>し<sup>け</sup>

才十一

左

忠人



い摩の花や海をこらう袖うきぬ浪

右脇

世人

何と云ふ事すは人写らんよ月雨闇

摩の糸のいさふはねふ小糸心の花ちうふけき遠く

きほくしぬのさひ川波のきぬ舟の文やを何ぞ許け

飛と写すよふのしほふ小糸の柱くおまゆわく手

糸と云く遊ん

中十一

左脇

忠人

むりし句ふ花を人寄る人陳はさ人

右

世人

改き火子うみうほ白しむらへ

枝すきおれけよよふれくろおき本の緑青くくろく

けりくせくくくぬ又かやの橙の中朗くえつくおのほの白

く受く柄と干れ橙の色を何と云く又おくくア

中十二

左

忠人

その地す儲を成りく今のもま

右脇

世人

其物の清ききき友のきをたぐ思ふ

石の枕古方ゆき本のおまの柳葉の千はらやのま

と和旦き音のたまをかのまの能石子一ゆあし

きさのふわりさひやま

中十三



左 脇

神のちかとも神二をきりハおめものし

忠又

右

言とありし骸骨踊の幕のきり  
神二をの神のちかとも人のちかとも秋のちかとも  
ちかともちかともちかともちかともちかともちかとも  
ちかともちかともちかともちかともちかともちかとも

神人

才十四

左 脇

月のさきも竹の舟の山市川武

忠又

右

さして竿の戸はけりやうハけり月

神人

公任卿の舟をきりあまの舟にこれ毛山一丸  
川武の舟をきりあまの舟にこれ毛山一丸  
吉木の板戸をきりあまの舟にこれ毛山一丸  
舟の戸をきりあまの舟にこれ毛山一丸

左 脇

忠又

船をきり画管やうハけり了 迄

神人

画管の舟をきりあまの舟にこれ毛山一丸

此舟の以焼船をきりあまの舟にこれ毛山一丸



才十六

左 膝

分限者下未くハ秋の夕暮をを控よ

忠 丈

右

秋の心は沙ハ依れカ尚是ハ

理 人

先年の夕暮を法沙の霜光依りてんハ

やありの病ハ

同フ着ラ依りて

妙に病の

才十七

左

破の町妻吼る大阿

忠 丈

右 膝

芋を種くををみねれや

理 人

右のり里の破

ハ破

くさの

才十八

左 膝

白子の

忠 丈

右

紙袋行

理 人



龍をアツクし能き一とふくく昔の甘きとくく

九のりハ作孝子ク句

才十九

左

忠文

時る夜松木の物于しとく

右勝

忠人

木くしとくぬ場牛のせと目

わき三折の秋ののちハやくくかひてとく夜松の森  
えさひく場牛のくつさ具とさひくされくかれく角の

上りゆくそとへおれぬいささうあんや

才二十

左お

のこふ

を庄のゆのれとくあし書のおく

右

や人

第しちきいく物何しうは長ゆとく

隆山のくくくゆのそとくあしかたし鶴のゆゆと海原  
け君のねとくくくくやある目とくくくくくくくくく

才廿一

左お

鬼文

袋く籠く一籠のあきき味あし

右

野人







うらとらひてうとまうく用持ゆへ

中二十四

左 孫

魁山家く粉味也

世に

平作のめらみそほきりくけり 納豆の如く

右

高貴家くみね

世に

旨味を味あり 吟も飲く者

紫生まの森の木く火のれく枯くなる森の林に  
からけめのみそを煮て入る乾坤を煮れらる 匠士世に  
其用切と高貴家くみねの白貴家くみねの世に  
この作を世にふくくするし 匠士世に

家の始より由おれぬのみそを煮て人志す  
才二十五

左

農丈

河部ふ店おれきりけり

右 孫

野人

ふりし手の志をきりつる 匠士世に  
店おのれけり 匠士世に  
何それかきりしは是を影をす

桐の齋主 柳青漫探 毫判



蘭のあゝ木井さくらとて  
どよも香の物清香とて  
女味のほくもさくらとて

秋風子

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

常盤屋の句合

中一番

左勝

字さくら八百屋の灯子芳し

右

と引と小松の系此とてあてて

たの芳字八百屋の灯子梅をゆき  
わらわら心柄すもさくら地の系此とて  
日の初を引とてさくらめしとて  
かきとて女中とてさくら仍以左勝

中二番

左







春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり  
南のくまの志願ふしくおわりのけり

中七  
左 孫

春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり

右

春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり  
予の心もやがて白髪の老父のけりしを  
豆かきしとてえぬまをこゝろを  
おやきしとてえぬまをこゝろを  
さう又春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり  
春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり

中七  
左

さう又春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり

右 孫

千太郎の心もやがて白髪の老父のけりしを  
豆かきしとてえぬまをこゝろを  
おやきしとてえぬまをこゝろを  
さう又春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり  
春の初より夏にかけて天と地とわたりしけり

中七  
左























お新浪の音昆布はさな屋のねすくわぬ

右

山すのき 袖豆千し 四まらつ ちやあし

たの白坂妻松家のゆきうに昆布を以てなをてはなすくわぬ  
あそび傳しうを對向浪のちけさひしきまにをてぬる  
さうしやしちのいぢる志保しぬのうに袖豆千し四まらつ  
の思やうとてきふなをなをぬるしぬのふおし

中二十一

左 膝

本うさしお風干はうたをきとてうのうさ

右

あやハ谷子子す房ハ埋木

えのう新湯のゆきをきく風のきよ未とわすくわぬ茶屋の  
園をばもいやくさすしき力のほをなぬ

中二十二

左 膝

えううしちねゆめをけ感くぬねうら

右

ゆけりのわあきうふあけあそぶ

あそぶのふとくうさくさのさあきあそぶ  
ゆけりあそぶの白ねうらぬ白坂のま女子んて  
又あそぶさあきあそぶあそぶあそぶ  
ねゆめあそぶあそぶあそぶあそぶ

中二十三







変し内々に新あり今に其物の終るも集り二十五名  
 此句合と新しと子と物とこふまゝに白く作る代新  
 一く尺とと曲あり思ふと言あり是を今に風傳といふ  
 且このれを名付て字無原とみみしを祝し代を先く此  
 名もく一傳神田は田町のけいもをいふも子里ののり  
 其字ハ麒麟とつけて是をたこのを風の卯ハ龍とつて  
 字の中ハ其若は二月の西瓜の解り紫人春みとくと此く  
 后のかつ一の紅ありとつけははるのしほの風とつて  
 きしひの原をあらとつて西の生をあらとつてこのをわらわら  
 此他を定めてとてかいらとつて紫の三枝とつて草花を  
 折て昔の地をあらとつてとつてとつてとつてとつてとつて  
 此とつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて

かきみ瓜

于時延宮八庚申季秋日

華桃園



讀の原

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 杳青

四季之句合

撰者

不卜 才丸 其角

一 雷

左 拈

落葉

雷つゝぬ木はさうし雨さう常う丸

風水

右

落葉さう馬士の法さやう塔の山

松涛

三 方の白き雪 ぬるや 又山も雨さう 不  
二 雨のさうのさう けさう けさう けさう けさう  
尺さう 切さう 五さう 五さう 五さう 五さう  
尺さう さう けさう けさう けさう けさう

二 雷

左 拈

雷

親さう 子さう 雷さう 雷さう かくさう かくさう

溪石







左 杉 細代

子年まきく花おめしるすもまきし 心水

右

ゆいなる木のゆきふやまぬわうれ 不角  
あしらの花をまきしる花をめつるすやう  
お又ゆいらの花のゆきしるすまきしるけき  
はる花をまきしるす

六 智

左 藤 石景

竹の葉は花をまきしるす 融のまき 細柳

右

はる花や竹引まきしるす 空舟の松 立止

花の白からまきしるす 花の白からまきしるす  
まきしるす 花の白からまきしるす  
花の白からまきしるす 花の白からまきしるす

七 高

左 藤 鴨

花の白からまきしるす 花の白からまきしるす 花雪

右

花の白からまきしるす 花の白からまきしるす 魚史

花の白からまきしるす 花の白からまきしるす  
花の白からまきしるす 花の白からまきしるす  
花の白からまきしるす 花の白からまきしるす











年々是く先々集ゆるるうていふさく  
 とも喜秋巻くやゆふ角なりく  
 をさくしはは秋の牡丹も花を  
 さくくあ無く折るくあれ対りる  
 るるしむあ秋をまけは折るく  
 色こく本なるをいひるひく  
 あくあ士よりいひるひく  
 樂よりえくくああめくも  
 とも喜秋の目もああ秋の  
 とも喜秋の目もああ秋の  
 とも喜秋の目もああ秋の

平白



